

SINAPIS



社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

月刊シナピスニュースレター

Vol.
111

2025. 8

年間テーマ ～戦後 80 年、平和の巡礼者として、祈り、行動しよう～



地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、
愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

カトリック大阪高松大司教区
社会活動センター・シナピス

TEL/06-6942-1784 FAX/06-6920-2203
Email/sinapis@ostk.catholic.jp
ホームページ/<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>



過去を振り返り将来に対する責任をになう

シナピスセンター長 松浦 謙神父

「過去を振り返ることは、将来に対する責任をになうことです」
聖ヨハネ・パウロ2世は、1981年の広島平和アピールで、
この言葉を幾度も繰り返しました。



写真提供：カトリック新聞社

キリスト信者で今年81歳になられる和田征子^{わだ まさこ}さんは、長崎に
原爆が投下された時、爆心地から2.9キロの所に住んでいました。

当時1歳10か月だった征子さんは直接けがや火傷はせずに済みましたが、大きくなってから、母から原子爆弾の恐ろしさとその非人道性を繰り返し聞きました。そしてこの世界から核兵器をなくさなければならぬと痛感しました。

1956年に、原水爆被害者団体協議会「被団協」が結成され、和田征子さんはその事務局次長になりました。被爆者たちは核廃絶の運動や署名活動など出来ることを懸命に続けました。

原爆がもたらす被害の証言を頼まれた和田さんは、「直接被ばくした当事者でない自分は語り継ぐにはふさわしくない」と初めは思いました。けれども、過去の記憶を引き継ぐことは未来への責務であると考え引き受けたのでした。

それ以来、和田さんは自分の語学力を生かし、アメリカの大学のセミナーで話したり、ニューヨークの国連本部で、核拡散防止条約の締結に向けてアピールをし、バチカンで開かれた国際会議でも訴えました。

はたして2017年、核兵器禁止条約が採択され、多くの国が参加しました。そして2024年、ノーベル平和賞が被団協に与えられました。和田さんは受賞のインタビューに答えて述べました。「これまで自分たちの活動には発信力が欠けていると感じていただけに、大きな励ましと力をもらえました。わたしたちは核兵器廃絶をあきらめません」。

今年から教区平和月間が設置され、各地でさまざまな学習会や平和祈願ミサがささげられています。私たち一人ひとりにも必ず何かの役目が与えられています。

「主よ、何ももたない私ですが、どうぞわたしを平和の使徒として用いてください」と共に祈り、行動しましょう。

「PTSD 日本兵の家族の思いと願い大阪証言集会」に参加して

6月29日 於:PLP 会館

事務局 ^{おかだ まさよ}岡田 雅代

PTSD(心的外傷後ストレス障害)は、ベトナム戦争後に広く知られるようになったものですが、アジア・太平洋戦争に従軍した兵士の中にも、殺し合いや自らが行った残虐な加害行為、また軍内のイジメなど過酷な経験が原因で PTSD を発症する方がおられました。

お話しくださった^{くるみざわしん}胡桃澤伸さんは PTSD を専門とする精神科医であり、また「くるみざわしん」の筆名で作品を発表される劇作家でもあります。胡桃澤さんは「自分の親族は加害者。生家は戦争加害と被害、両方を背負っている」と話されます。長野県の農村の村長であった胡桃澤さんの祖父は、当時の満州移民政策に賛同し、ご自身の村から開拓団を送り出します。行き先は未耕の地ではありません。それまで暮らしを営んでおられた人々の家も畑も根こそぎ取り上げて、人々を追い出したその土地への入植でした。もちろん国策に従って行われたことです。しかし、開拓団を送り出すに先んじて、入植予定の村を視察に訪れた胡桃澤さんの祖父は、日記にこう書き残しておられます。「いい村だ」。私はこの言葉を忘れることができないのです。「いい村だ」。「いい村」のはずです。それまで長い間、何世代もの人々が営々と耕し、暮らしを営んでこられた土地なのですから。その「いい村」を突然追い出されてしまった人びとは、これから先いったいどうなるのか、どうやって食べていけばいいのか。胡桃澤さんの祖父は、戦争によって、そのようなことに思いが至らない者に変えられてしまったのだと思いました。そして「これはひと事ではない。同じ時代同じ立場であつたら、まちがいなく私自身も同じことをするだろう、言うだろう。国の役にたっている自分自身を誇りにさえ思うに違いない」と確信しました。

日本の敗戦と同時に、開拓団の人々は集団自決されます。自分たちが入植するために土地を追い出されてしまった人々からの襲撃を恐れてのことだったそうです。

戦後そのことを知った胡桃澤さんの祖父は、自宅の鴨居に縄をかけて自死してしまわれます。胡桃澤さんは、「村人の集団死も祖父の死も、どちらも私には語り伝えられなかった。私の家は混乱していた」と語られます。そして「精神科医になり、劇作家になったのは自己治療の試み。表現し、人と出会い、生きられるようになるためだ」と。

また胡桃澤さんは、ご自身の専門である PTSD について、「僕の大事にしている PTSD」と表現されます。「兵士・レイプ被害者 加害者がいて被害者がいる。PTSD という病名のもとでは、加害兵士も性暴力被害者も同じ立場だと考える」「PTSD という病名は被害者と共にある」「PTSD と診断することは重い。患者と連帯し、加害者と対峙すること」。こう話され、PTSD という病と真摯に向き合う、医師としての胡桃澤さんの姿勢に心を打たれました。

「PTSD」「トラウマ」といった言葉は軽々しく使うべきではない、と諭されました。

最後に胡桃澤伸さんが「ぜひ読んでください」と推薦された本を1冊ご紹介します。

朝日新書「ルポ戦争トラウマ」。

戦争 PTSD についてもっと知っていきましょう。

日本で開催される武器見本市

おおもと あさみ
大元 麻美（フリーライター）

千葉県千葉市の幕張メッセで今年も「武器見本市」が開催された。日本の防衛省、経済産業省らが後援し、「日本において唯一の大規模防衛・安全保障総合展示会」と銘打ってはいたが、実際は「武器の売買」をする商談の場だ。

世界 450 社以上が出展したこの「武器見本市」には、78 カ国から政府関係者を含む総勢 8000 人が参加していたため、会場前に集結した市民有志 350 人は「どの国の子どもも殺させない」と、「死の商人」たちに強く抗議した。

武器取引反対ネットワーク代表の杉原浩司^{すぎはらこうじ}さんの情報によれば、展示場の中央に設置されていたのはイスラエル最大の軍需企業エルビット・システムズ製の自爆型ドローン「スカイストライカー」。

今年4月、イスラエル軍がパレスチナ・ガザの避難民テント等を攻撃した際に使用され、子どもを含む 30 人以上を虐殺した武器だ。

特筆すべきことは、武器を売り込む際に「実証済み」という言葉が使用されること。つまり「大勢の人々を殺すことができた」ということを自負しているわけだ。

日本では 2022 年末、閣議と国家安全保障会議で「殺傷能力のある武器の輸出」を解禁する決定を下した。

前教皇フランシスコは 2015 年 9 月 24 日、米国連邦議会でこう演説している。

「なぜ個人や社会に対して計り知れない苦痛を与えようと計画している者に殺傷能力のある武器を売るのでしょうか？ 残念ながら、それは単にお金のためです。そのお金は血にまみれています。武器の売買をやめさせることは私たちの責務です」。

この巨大な「悪」を前に、私たちに何ができるのか？

「ピース9の会」の呼びかけ人、松浦悟郎^{まつうらごろう}司教（名古屋教区）は今年7月13日、東京・町田教会で講演し、教皇フランシスコの 2025 年通常聖年公布の大勅書『希望は欺かない』や、第1回福音宣教推進全国会議（NICE・1）の精神を引用しながら、信徒ら聴衆をこう激励した。

『非暴力によるキリストの平和』を実現しよう。そう言うと、多くの人は、理想と現実とのギャップに『それは無理だ』と、悟ったようにせせら笑うでしょう。教皇フランシスコは、悪と暴力にはかなわないなどと思い込むことは誘惑だと強調しています。その誘惑に陥らないように、『現実』から出発し、少しでも理想とのギャップを埋める方向で歩き続けること。そのギャップがゼロになるまで歩みを止めてはなりません」

どんなことでもいい。「平和な世界の構築を目指して」、キリストとともにできることから始めていこう。



幕張メッセ会場入口で、「武器見本市」に反対する市民有志の大抗議行動

平和月間に思うこと

事務局

おおもり ゆうじ
大森 雄二

5月に参加した沖縄の集会（タイトル：なぜ、1972.5.15は「シン・屈辱の日」なのか）のことが今も心に残っています。

パネラーの一人、沖縄出身の宮城善光^{ナグシクヨシミツ}さんは、沖縄の問題は日本と琉球の歴史問題として捉えてほしいと訴えました。



1879年に独立国琉球を武力で奪い日本国に組み込んで植民地扱いで利用してきた歴史、国体護持のための捨て石の沖縄戦、戦勝国アメリカのために売り渡されたオキナワ、1972日本再併合後は日米安保のために米軍基地押し付け、そして現在は日本の自衛隊による琉球の島々の軍事要塞化が急激に進んでいること。地上戦の悲惨さや基地問題だけを取り上げて、「沖縄の人たちは大変な思いをしているんだ」的なまとめはやめてほしいと言われました。

「もっと沖縄県が努力していれば、もっと早く普天間の移転も進んだ」。今年4月の中谷防衛大臣の言葉です。沖縄県民は、新基地建設に反対の意思を県民投票、国政選挙、知事選で示し続けてきました。日本政府が沖縄の民意無視で押し付け続けても、圧殺し続けても、金をばら撒いても、自分たちの思い通りにならないのは、沖縄県民の努力が足りないからとの事か、と宮城さんは憤ります。

国内問題としてではなく、先住民族としての琉球民族の人権と主権回復の問題として、世界から日本政府に厳しい目を向けさせる。沖縄琉球に思いを寄せている大和の方々にもそんな認識を持って欲しいとまとめられました。

もう一人のパネラー、松本亜季^{まつもと あき}さんは、辺野古での座り込みに参加してから地元大阪に戻り、20年近く、毎週土曜日の午後、大阪駅前での街頭アピールを続けている方です。

以下、集会パンフにある松本さんの言葉を紹介します。

「思えば『4.28 屈辱の日（日本の独立と引き換えに、米統治が始まった日）』も『5.15 復帰の日』も『6.23 慰霊の日』もその言葉のどれをも鵜呑みにしてはならなかった。鵜呑みにし、日本人がそれを一緒に祈ったり闘ったりしてきたことが、日本社会の間違いをより一層深刻にしてきたのではないだろうか。

思えば、幼いときから受けてきた人権教育も全部鵜呑みにしてはならなかった。

私のこれまでは・・・身体の内側に無意識にはびこる『みんな同じ人間』『他者を理解する』という“きれいな”言葉を捨て去ることと、改めて学び直すことの連続だった。

私自身、大人と言われるようになってからずいぶん久しいが、それでもやはり『教育』を授けた親を、上の世代を批判しなければならない。なぜあの戦争が終わったとき、天皇の責任を問えなかったのか。戦死者に向き合い、自分たちの責任を問わなかったのか。マジョリティとしての生きやすさ（相対的な）を自覚することなく、マイノリティと『連帯』することに夢中になってきたのか。」

平和月間の行事が、歴史について学び直し、今からの未来をつくる私たちのあり方を見直すきっかけとなりますように。

「ガザ人道財団」 —— 第2のナクバの始まり（2）

シナピス運営委員 にしぐち のぶゆき
西口 信幸

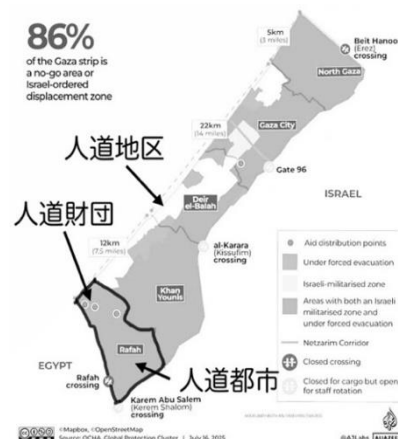
みこころが天に行われる通り地にも行われますように

ルカ11:2より

天のみこころとは何でしょうか？ガザの人たちに「人らしく生きる」ことへの深い信仰を感じるがあります。この「土地」に生まれ、家族から生きる喜びを学び、共に助け合いながら年を重ねる、そんな当たり前の生き方が大きな恵みなのです。パレスチナの人たちは1948年からずっと自由を奪われて生きてきました。不正義を受容する中で、自分のいのちよりも大切な「魂」を知り、子どもでも殉教することを知っていると感ずることが多くあります。しかし、ぎりぎりの生命の選択を迫られる今、その「魂」が失われようとしています。

「ガザ人道財団」——絶滅収容所「人道都市」への布石

「天井のない収容所」で支援を断つことは餓死を意味します。その歯止めがトランプによって取り払われ、3月から人道支援は全て停止されました。飢餓状態の5月末に生まれたのがアメリカ主導の「ガザ人道財団」での虐殺など、非人道性も問われていますが、4箇所に集約した配給センターにガザ市民を北部から移動させることは、さらにこの配給センターを拠点とする絶滅収容所「人道都市」に全市民を閉じ込める計画の布石なのです。次の停戦期間中に建設をするという計画です。トランプの言う停戦は、この「人道都市」に向かうプロセス、ガザ市民の国外追放、民族浄化を進めるための、許されざる仕組みです。しかしながら「人道財団」を非難しながら止めることができない世界が、この民族浄化の動きをどうやって止めることができるのか、私たちは問われています。



実現しない恒久停戦——「ノーベル賞」推薦に騙されるトランプ

ネタニエフは何をしにアメリカに行ったのか？停戦の相談ではありません。功を焦って安易な停戦を口にしないよう、トランプに約束を取り付けに行ったのです。「ノーベル賞」推薦を餌にまんまと言質を引き出して帰国しました。トランプは皆殺しにあいたくなければ人質を出せと脅せば人質問題は解決する、早く次のリビエラ作りにかかりたいだけです。翻ってネタニエフは、ハマスとまともな停戦交渉に入れば、「人道財団」の議論になり「民族浄化」計画が頓挫することがわかっています。



「17年間の閉じ込められた収容所生活を終えて自由に行き来できる祖国が欲しい」ガザの人たちの願いが表に出ないよう、「アメリカが承認したイスラエル案をハマスが拒否」した形をとって戦争を続けたい、その過程で占領を強め、民族浄化に近づきたいのです。奪った土地から追放することしか考えていません。入植した土地から野獣が追われるのが当たり前のよう、ガザ原住民という生き物を追い出して文明を守りたいと心から思っているようです。

正しい報道に耳を傾け、忘れられた人に連帯の声をあげよう

何の罪もない市民を銃で狙い撃ちする「人道財団」に私たちは慣れてしまっています。7月初めに始まった停戦協議では、残った人質の交換のみが焦点であるかのように、報道機関は伝えていてすでに86%の土地を占領された200万人のガザの人々に待っているのはガザの土地から離れることしかないような雰囲気すら生まれています。

遠い中東の忘れ去られた人たちの苦しみはSNSを通してしか伝わってきません。しかし関心を持って聞こうとすることで、報道を通して確実に私たちは真実を知ることができます。少し前のイスラエル発言を思い返してください。その場しのぎの発言で、実態は少しずつ着実にガザ消滅に向けて進んでいることに気づくはずです。それを知りつつ報道機関がイスラエル発言を垂れ流し続けていることにも気づくはずです。そこに気づき、関心を持つことがガザとの連帯になります。今動かなければ、ガザの人々を故郷から追放する動きを止めることができません。

イスラエル、アメリカと面倒を起こしたくない、と言って口をつぐんでいる世界のすべての人々にお願したい。どこでも良い、どんな形でも良い、今しか声を出す時はありません。諦めない声は力を生みます。声を出しましょう。

力による傲慢な生き方、人類を滅亡に導く世界を制止しようとして声を出している、勇気ある人たち4人を紹介します。みんな女性です。特に日本の二人の発言は私たち、日本人が無関心でいることを改めて教えてくれています。

※1 グレタ・トゥンベリ：同士と共に船でガザ上陸に挑戦、洋上でイスラエル軍に拿捕された。



「たとえどんなに不利な状況であっても、私たちは試み続けなければなりません。なぜなら、努力をやめた瞬間に、私たちは人間性を失ってしまうからです」

※2 フランチェスカ・アルバネーゼ：国連でただ一人、声を発し続けている国連特別報告者、イスラエルのジェノサイドを批判し、「EUは最大の貿易、投資相手、イスラエルの共犯」と警告、イスラエルとの取引停止、ガザでの大量虐殺を止めるために行動を起こすよう世界の各国、企業に呼びかけた。



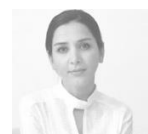
「凄惨な実態を知りつつ、誰も止めない。なぜ許されるのか。儲かるからだ」

「**ジェノサイド経済**」としてグーグルやマイクロソフトなど、ガザ戦争で利益を得ている60社以上の企業の報告書の後、アメリカは「反ユダヤ主義」として制裁を科した。世界では、ノーベル平和賞の推薦に向けて署名活動が行われている。

人道財団、停戦協議についての二人のコメント、TVでは珍しく、市民に寄り添うコメントです。QRコードで開いて、声を聞いてください。3分だけ、あなたの時間をガザの子どものために！

※3 サヘル・ローズ：TBSサンデーモーニング発言2025-7-6

https://youtu.be/glOqcXLqgeY?si=Ar_wOY5BusOJWoNv



※4 はたけやますみこ 畠山澄子：TBSサンデーモーニング発言2025-7-13

https://youtu.be/QqH3eLLBAnc?si=QtT009HZT19-o_3z



視覚障がい者への情報保障について

たけざき ゆうこ
嶽崎 裕子

障害者差別解消法は 2024 年 4 月 1 日から、事業者へ合理的配慮の提供は、「努力義務」から「義務」となりました。「必ず行わなければならない」のです。

カトリック教会における視覚障がい者の情報保障について考えてみたいと思います。

視覚障がいの特性

- * 全盲（まったく見えない）
- * ぼやける、細かい部分がよくわからない
- * 視野障がい（見える範囲が限定される）
- * 光覚障害（暗いところで、視力が低下する）
- * 全盲ろう（まったく見えず、まったく聞こえない）
- * 全盲難聴（まったく見えず、聞こえにくい）
- * 弱視ろう（見えにくく、まったく聞こえない）
- * 弱視難聴（見えにくく、聞こえにくい）



全盲の人は、音声や点字など、主に聴覚や触覚によりミサなどの情報を得る。中途失明者は、点字の読み書きができない人もいますので、音声や電子データなどで、ミサなどの情報を提供することが必要です。弱視の人は、音声の他、拡大文字など視覚からもミサなどの情報を得ることができます。パソコンやスマートフォンの音声読み上げ機能を利用することも可能です。

盲ろう者へのミサなどの情報伝達には、触手話、弱視手話・指文字・指点字・点字・手のひら書きなどがあります。

視覚障がい者にミサなどの情報の提供をする場合、対話が重要となります。目の見える人からのアプローチが必要です。点字のミサなどの情報を机の上に準備していても、点字があることを伝えないと、点字があることがわかりません。

「障害者による情報の取得および利用並びに意思疎通に係る施策の推進に関する法律

（令和 4 年法律第 50 号）の中に、

- * 日常生活・社会生活を営んでいる地域にかかわらず等しく情報取得等ができるようにする
- * 障害者でない者と同一内容の情報を同一時点において取得できるようにする

と、あります。

これにはまず、視覚障がい者との対話が必要です。そして、点字や音声などの準備をしておくことが必須なのです。

（参考：千葉県「障害のある人に対する情報保障のためのガイドライン」）

障がい者委員会より

万博バチカンデーの後のミサで

みやなが ひさと
宮永 久人

6月29日、大阪の玉造カテドラルで、万博のバチカンデーに合わせて来日されたパロリン枢機卿のミサに与かった。バチカンの國務長官の要職者ということで、入り口に金属探知機が設置され、手荷物もチェックされ、シークレットサービスとおぼしき人たちがたむろしていた。私は車椅子ということで当然金属探知機に引っかかったものの、手荷物検査もなく、ノーチェックで最初に入堂したが。

手話通訳、要約筆記の依頼がなかったと事前に聞いていたし、後で聞くと、文書の点訳の依頼もなかったという。

英語を中心に日本語、ベトナム語、韓国語によるミサ。冒頭、^{まえだ}前田枢機卿の挨拶が日本語であり、それが英語でスクリーンに映し出され、従って日本語表示はなし。パロリン枢機卿の説教は英語で、スクリーンは日本語。私は冒頭の挨拶は英語を読んで理解できたが、他のろう者たちがいたら、理解は難しかったと思う。

いったい誰が中心になって今回のミサを設定したのか。委員会なるものがあつたとして、その中になぜ障害者関係者が入らなかったのか。ある聖職者に問い合わせると、パロリン枢機卿のバチカンの國務長官という立場上、国賓級の扱いになり、一般人に接触することになるので、警備当局の指示に従ったと言う。しかし、国内の法律として障害者差別解消法があり、教会も民間企業として合理的配慮が義務づけられており、これを欠くことは明らかな法律違反である。

今日、手話通訳をつけることは首相の記者会見に際しても常態化している。シークレットサービス会社に障害者への合理的配慮など頭にあるはずがなく、主催者たる司教協議会または大阪高松大司教区が自覚的・主体的に対処すべきだったはずである。

教会の中は治外法権であり、日本国の法律に従う義務はないというなら、主のみことばに立ち返ることになる。主は貧しい者、虐げられた者を救うために来られたはずである。

^{たかやまうこん}高山右近の列福式といい、今回のミサといい、教会の中では今なお障害者が上から目線で見られ、軽視されていることを実感した。「百匹の中の一匹、と主が言われても、教会の中はそうでない」——そう皮肉っぽく言ったある司祭の言葉が響く。それでも私がミサに与り続けるのは、私たちを癒し、日々苦しみを担ってくださる主を信じ、主への信仰を証しするためである。マルコ 2:1-5 にあるとおり。

雑巾はありますか？

おおもり ゆうじ
大森 雄二

2回目となる今回は、作業日を1日増やし、実質5日間(初日は移動日)お手伝いをしてきました。参加者は、難民申請者3名(ナイジェリア人のオラさん、イラン人のAさんとSさん)、日本とフィリピンのダブルの大学生けんちゃん、事務局からビスカルドさんと私の6名です。けんちゃんとビスカルドさんは3日目の作業終了後、午後6時過ぎに七尾駅発の列車に乗り、大阪へ帰りました。

活動初日は、輪島市の空熊地区^{そらくま}に一人で暮らす80代の合田さん^{ごうだ}を訪問しました。休憩した街中のスーパーからだんだんと店舗や家屋が減っていき、山道を走ること30分あまりでお宅に到着しました。雪の時期のことを考えると怖くなる道のりでした。合田さんは69歳で運転免許を取ってこの道を走っていることを伺い、びっくりしました。

朝のミーティングでは、カリタスのとサポートセンター(以下、サポセン)の森田さん^{もりた}から、「今日は、頼まれた作業をこなすことよりも、合田さんとのおしゃべり、交流を大切にしてください」と言われました。

合田さんは多国籍チームの来訪に驚きながらも明るく受け容れてくれました。依頼された作業は、家の裏の池に橋を二つかけることでした。山の中なので、材料となる木材は豊富ですが、ひざあたりまでの深さの池の中に土台となる石を組み、その上にちょうど良い寸法に



加工して木を並べていく作業は、なかなかの現場作業でした。雨にあたりながら池に入り続けたSさんは、全身びしょ濡れでしたが、水びたしになった長靴の中を指さして「ここに魚いるよ～」と笑わせてくれます。

昼食は、合田さんが家の周りで育てる野菜の天ぷらと煮もの、ほお葉にくるまったきな粉餅とおはぎなど、自然の恵みたっぷりの手料理をいただきました。合田さんはこの昼食を共にすること、できればビールで乾杯してゆっくりおしゃべりする時間を楽しみにしていましたが、私たちは橋を完成させて帰るか、そわそわした気分のお昼でした。

何とか完成した2つの橋を、合田さんはとても喜んでくれました。びしょ濡れのSさんはシャワーをお借りしてさっぱりしたものの、着替えを用意していません。合田さんは家にあるゆかたと帯を彼にプレゼントしてくれました。ゆかたにビールで合田さんとの記念写真におさまる彼の姿、とてもボランティア中とは思えないユニークな微笑ましい一幕でした。

3人の娘さんが結婚して輪島を離れ、一人になった合田さんにとって、サポセンが行う週に1回の見守り訪問は大切な時間のようです。合田さんが、私たちの訪問を娘さんの一人に携帯電話で嬉しそうに報告していた姿や、私たちの作業を見つめ



ながら、「みんな仲が良くてうらやましい。やけるなあ」と何度もつぶやいていた姿が印象に残ります。

合田さんと同じように、被災した家屋に一人で住む選択をした独居高齢者は、能登半島全体に多く残っていることでしょう。震災前から独居だった方も、震災や豪雨の後に若い家族が転居して独居になった方もいるでしょう。能登の復興がこうした方々の生活を置き去りにして進められている中、孤立した被災者への見守り訪問を続けるサポセンの活動に、これからもできる限りの協力をしたいと強く思います。

活動4日目は、地区のお祭り石崎奉燈祭(8/2)の前に、施設から家に戻るお父さんのため、寝室を整える依頼に出向きました。ベッドや家具の移動の手伝いと聞いていましたが、寝室となる部屋には、整理されていない家財が散らかっている状態で、依頼主の娘さんに一つ一つ要る物かどうか聞いて整理を進め、見えてきた床や壁を掃除しながらの作業でした。



せっかくの機会だからできるだけきれいな部屋にと思い、依頼主さんに「雑巾はありませんか」とお願いすると、渡されたのはウエットティッシュの箱でした。どうして？という気持ちを抱えたまま作業を終わらせて、帰りの挨拶をしたときに、依頼主さんが口を開きました。「『おらっちゃん七尾』（被災者の依頼とボランティアをつなぐ民間の災害ボランティアセンター）と出会って助けてもらえなければ、私たちはこの家で暮らせていなかった。実は私、腰から下にしびれがあって、外に出るときは車椅子を使っているの」。半日近く一緒にいながら、依頼主さんの体の苦勞に気づけず、掃除ができない人、という偏見の目をもった自分が心底恥ずかしくなりました。

サポセン七尾ベースでは、毎週日曜日、じんのびカフェを開いています。七夕の前日だった6日は、お客さんに願い事をかいてもらい、笹に飾っていきました。その中で一番印象に残っているのは、2人の小さな子どもを連れたお母さんの願いです。「8月の沖縄への家族旅行が安全で楽しいものになりますように！」

被災者の皆さんが、それぞれの事情を抱えながら、それぞれのペースで前を向くお手伝いを、今回もさせてもらいました。日本語があまり得意ではないAさんは最近、辞書を片手に、おらっちゃん七尾の朝のオリエンテーションで配られる処分品の分別に関する注意書きにとらめっこしています。能登での出会いが、確実にAさんを動かしているようです。

☆9月2日(火)～5日(金)の日程で、次回の訪問を予定しています。

ご一緒できる方、ぜひ事務局までご連絡ください。

★おらっちゃん七尾が7/19よりクラウドファンディングに挑戦しています。

「最後の一人まで支援を届けるために災害ボランティアセンターの活動を継続したい - CAMPFIRE (キャンプファイヤー)」というタイトルです。

おらっちゃん七尾・クラファンで検索してみてください。

教皇フランシスコの思い出

マリア布教修道女会 シスター ^{しかやま} 鹿山 ミエ子

私は毎月刑務所に行かせてもらいます。そこには、教皇フランシスコへの感謝の「時」を長い間共にしている「私の姉妹たち」がいます。私は姉妹たちに出会うこのミッションにとっても感謝しています。

お祈りから始める訪問ですが、いつも教皇フランシスコについて話し、そして彼のために祈ります。貧しい人々や社会的に弱い立場にある人々に寄り添われた教皇フランシスコ。

教皇様の多くの刑務所訪問や、特に聖週間の刑務所での洗足式の様子などを聞く時、彼女たちはとても興味深く耳を傾け、感動しています。

教皇は受刑者たちに「主よ、私を赦してください、と祈りましょう」と話されました。

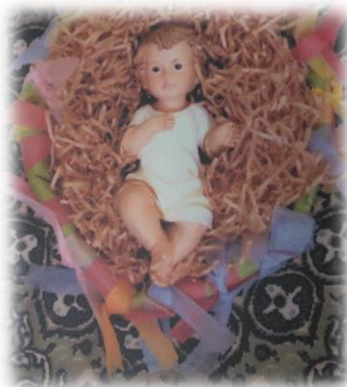
イエスは一人ひとりに「あなたは私にとって大切なのだ」とおっしゃいました。「主は決して私たちを見放しません」。「主は決して私たちをゆるすことに飽くことはありません」。「主は私たちをととても愛しておられます」。

こうした話を聞く時の彼女たちの様子は感動的です。そして教皇フランシスコが入院された時にはとても熱心に祈りました。

12月、私は教誨でいつも、キリストの降誕について話し、彼女たちは目を輝かせます。それなのに私が持つて行く幼きイエスのご像は小さく、しかもたくさん修理され、あまりにもかわいそうな幼子の姿でした。私は彼女たちに話して、教皇フランシスコに幼きイエスのご像をお願いすることにしました。

私はさっそく彼女たちと共に祝うクリスマスのことを説明するため、教皇フランシスコに手紙を書きました。すると間もなく何という奇跡！ かわいい、それはかわいい幼子のご像が大きな箱におさまって郵便で届きました。2016年10月の事でした。

あれから9年の月日がたちました。毎年、教皇フランシスコのプレゼントの幼きイエスと共に、クリスマスはさらに感謝のお祝いです。



これからもずっと教皇フランシスコへの感謝と共に、この幼きイエスといっしょにクリスマスを祝います。この写真は去年のクリスマスに彼女たちが作った馬ぶねです。リボンの結びは彼女たちの幼子への祈り、感謝、願いなどを表現していて、温かなそして愛情いっぱいの馬ぶねが出来ました。

教皇フランシスコありがとうございます！ 天国から彼女たちを見守っていて下さい！ 感謝を込めて！

ゆるゆる会レポート

枚方教会信徒 きぬがわ まこと 絹川 誠

6月、7月と続けて、「私たちそれぞれの生きづらさ」をテーマに集まりました。

6月は、団塊世代・バブル世代・就職氷河期世代・ゆとり世代・さとり世代と様々な世代の方々が参加しました。



最初に A さんが、自分の就職氷河期の体験や偏差値教育の中での競争、そして将来への不安について語ってくれました。私たちは、将来の不安—老後、健康、子ども、仕事……そのためにお金を稼ぐことばかりに追われていないだろうか。気づけば、「今」はいつも後回し。未来の安心のために、今の時

間を犠牲にしていないか？という問いが、心に残りました。

やりたいことより「やるべきこと」が先にくる日々の中、「今を生きるって、どういうこと？」という問いに、正直、誰もがうまく答えられませんでした。

高度経済成長期を生きてきた世代は「働けば豊かになる」という実感があり、今よりも「将来に希望を持っていた」と語ってくれましたが、下の世代は「どれだけ働いても先が見えない」「税金も年金もただ引かれるだけで、どう使われてるか分からない」。そんな声が多くありました。

北欧では「高い税金も納得して払ってる」と聞きます。なぜなら、自分たちの意思が制度に反映されているから。日本では「取られてる」と感じるのは、関わる手段が見えないからかもしれません。

民主主義の話題からは、かつての学生運動にも話が及びました。私たちは学校でも社会でも「従うこと」ばかりを教えられて、「声を上げる」経験をしてきたか？ 60年代、多くの若者たちが「よりよい社会をつくりたい」と声を上げたけれど、一部が過激化したことで、「運動＝怖いもの」というイメージになり、理想の社会を追い求める力や対話の文化が失われたのかもしれない。「社会はどうせ変わらない」「デモをしても意味がない」—気持ちは分かりますが、でも、本当にそれでいいのかな？と、今回改めて思いました。

7月は、「ちょっとした雑談が減って、誰かと気軽に話す余裕がなくなってきた」という声から始まり、日々の中でふとした孤独を感じているのは、年配の方だけでなく、皆が共感するところでした。

職場の雰囲気の変化や、人とのつながりの薄れも話題に。「昔はもう少しおおらかだった気がする」「何か言うとパワハラになるかと気を使ってしまう」など、現代ならではのコミュニケーションの難しさが語られました。

「生きづらさ」という言葉自体にも意見が交わされました。「昔のほうがずっと大変だった」「言葉ばかりが先走って、本当の気持ちが伝わりにくくなっているのでは？」という声もあり、それぞれの人生経験から生まれる多様な意見に、場がじっくりと深まりました。

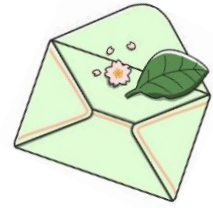
重たい話題もありましたが、決して暗くならず、お互いの気持ちを受け止めながら、少しずつ考えを深めていける。「こういう場があるからこそ、本音が話せて、自分自身を見つめ直せる」という感想が多く聞かれました。北欧の図書館のように、「学び」と「出会い」が共存する場として、この「ゆるゆる会」もまた、人と人がつながる大切な場所になっていると感じます。



シナピスホーム便り



事務局 やまだ 山田 なおこ 直保子



読者の皆さま、こんにちは。今年は梅雨明けが観測史上最も早くされて、毎日暑いですね。

暑さに負けずに、ホームのカフェは開催していますが、6月28日はランチを開催しました。

最近は料理ができる難民移住者が自立していき、ランチの開催も難しくなっているのですが、この日は、私事で恐縮ですが、私の誕生日だったので、支援を離れたイランの難民さんがランチをごちそうしたいと申し出てくれて、朝早くから用意をしてくれました。

ランチはイラン料理の「バガリポロ、ゼレシュクポロ（骨付き肉とともに、クコの実や、そら豆をつかった2種類のピラフのようなもの）シーラーズサラダ（シーラーズ地方でよく作られる野菜のサラダ。イラン産乾燥ライムが味のポイント）ククサブジィ（野菜とハーブを卵でとじたもの）トマト風味の野菜スープ」と5種類の料理でとても豪華！

同じイラン人でも作り方はその家庭それぞれで、今回はサフランの抽出方法が面白く、皆さまにお伝えしたいと思います。

イラン産のサフランは、とっても高級なもので、日本で売っているサフランとは、味も香りも違います。抽出方法で色も変わるらしく、慎重に煮出していきます。

何度もサフラン料理を作っている彼は、ポットで湯を沸かしてその湯気でじんわりと抽出する方法を、どうにかイランの味に近づけるよう、新しく何かを買ったりするのではなく、ホームにあるものでできるように何度も試作を重ねました。いろんな方法を家族に聞いたり、インターネットで調べたりして、この写真のような方法で抽出する方法を思いつきました。ポットの上に、なんと急須を乗せる。この画期的な方法にビックリ。

抽出している間、私を呼んで、すごく自慢げに見せてくれました。湯気が大きな役割をするとのことで、蒸し器も以前提案したことがあったのですが、「いろいろ試したけど、このやりが一番いい。色も味もイランに近い」と言い、私は急須が割れないかちょっと心配しましたが、任せました。



斬新な抽出方法！

もちろんイランでは専用のものがありますが、原理は同じで、あるもので考えて最善の形を作るということに感動しました。時間をかけて抽出したサフランは色鮮やかで風味もしっかりあり、別格のおいしさでした。

今回のランチでは、フィリピンの親子やその友達（大人4人、子ども2人）が来訪。不登校になっている中学生の男の子もいて、初めは緊張して険しい表情をしていましたが、すぐになじんで、冗談ばかり言って笑っていました。

妹の面倒を常に見ていて、とてもやさしいお兄ちゃん、学校には行きにくいだけで、おうちではよく動くなんの問題もない少年らしい少年でした。盛り上げ上手なフィリピン人、場が明るくなり、お客さんはとても喜んでいました。

難民の事を知りたいと来てくれた高校生3人組も、よく食べ、よく笑い、難民移住者や、フィリピン人と話をしていました。

高校生たちは実際に難民移住者とお話する機会がないので、とても喜んでくれました。日本では数少ない難民認定されたミャンマー人も遊びに来て、今までの経緯を話してくれました。皆さん英語ができるので、言葉に困らず会話できていて、羨ましかったです（笑）。滋賀や京都から来てくれたのですが私の関西弁が面白かったみたいで、ずっと笑っていました。



サプライズでケーキも登場！みんなで美味しく頂きました。難民移住者がサプライズで用意した為、勘の良い私にばれないように、「今から仕事」とやさしい嘘をついて、ケーキを買いに行き、持って入ったらばれてしまうので、私の気がそれるよう他の難民移住者が異常なくらいおしゃべりになってほかのお客さんも巻き込んで話をし出し、その間に二階にそお〜と上がって隠したそうで、ケーキを外で2階から吊り上げようと考えたり、苦労話をたくさん話してくれて、みんなで大爆笑でした。来ていただいた皆さんもスタッフの難民さんも本当に楽しそうで、笑い声の響く一日でした。お祝いしていただき、ありがとうございました。

イランとイスラエルの紛争で、イラン人の難民移住者が現在は多いシナピスでは、ともに心を痛めています。毎日のように様々なニュースが飛び交い、「北のほうにお父さんとお母さんが逃げたけど昨日から連絡が取れずに心配してる」「動画を送ってきたから見てください」と爆弾を落とされ煙だらけになっている風景をみせてくれたり、本当に大変な状況です。

カフェのお客さまも皆さん心配してくれて「イランにいる家族は大丈夫ですか？」「心配ですね」と声をかけてくださる事が多く、難民移住者たちも今の状況を説明したり、お客さまの心遣いに感謝していました。そのことが、いくら心配しても帰ることのできない離れて暮らすイランの難民移住者の孤独を少しでもやわらげ、励みになってくれたらいいなと思います。





イスラムとカトリックの追悼式

事務局 やまだ なおこ
山田 直保子

イランの M さんが、母と妹を不慮の事故で一度に亡くしました。突然の知らせに、号泣し絶望している M さんを見て、私たちは、ただそばにいたことしかできませんでした。

シナピスでは、イスラムとカトリックの融合した追悼式を行いました。こういった形式の追悼式は3度目ですが、「苦しいときは同国人の同志をみんなで支え合う」といったイラン人らしい考えで、クチコミで広がり、M さんを知らない人も含めたくさん集まりました。みんなで協力して一緒に式の準備を進めていきます。



彼の希望を聞いて、祭壇に飾るお花を一緒に買いに行きました。「真っ白なお花にしたい、その中にお母さんと妹の赤いバラが2つ欲しい」と具体的な提案があり、用意しました。

ほかのイラン人がいるため、写真や名前を公表せず、代わりに M さんの母と妹へのメッセージを用意してもらって額に飾ります。その人それぞれ様々な背景があり、秘密にしないといけないこともあります。私たちはできるだけ、本人の意向に沿った形で準備して行きました。

追悼式が始まり、聖書を読みコーランを読み、宗教に関係なく、参列した皆さんのそれぞれが、亡くなった友の母と妹を、心から偲び祈りを捧げました。普段あまり仲が良くない人も、ひとりひとり前に出てお焼香をして、真摯に神に向き合い、祈り、抱き合い、ねぎらう姿を見て、心から彼らを尊敬し涙が止まりませんでした。

M さんがとてもこだわっていた「白いお花」は百合でした。ふと、聖堂のステンドグラスを見上げると、白い百合が描かれていて、神様がなせる業だと心が震えました。

たくさんのイラン人男性たちの前に姿を見せられないけれど、朝早くからこの式の為に、伝統的なお菓子を祈りながら作ってくれたアフガニスタン女性の想いも忘れてはいけません。

追悼式が終わり、みんなでそのお菓子を食べながら、近況報告など話しながら笑ったり冗談も言ったりして、M さんにも笑顔も見られ、少しほっとしているときに、一人がペルシャ語で何か言うと全員で復唱し祈りが始まります。

急に皆さんが一堂に声を出し祈る姿にびっくりしたのですが、私たちも祈りました。その祈りが 2 回ありました。なんて言っているのですか？ と横のイラン人に聞いたところ、「もう二度とこういう悲しい集まりが起きませんようにと言っています」と、日本語で説明してくれました。



冷たく感じる世の中、なんて愛に溢れているんだろう。人間って本当に素晴らしいなと思えるお式でした。

Mさんの悲しみはそう簡単に癒されませんが、これからも一緒に寄り添って行こうと思います。

7月19日 僕はやってない！

事務局 ビスカルド^{あつこ}篤子

ある刑事事件に巻き込まれた人に関わっています。覚せい剤所持と警察車両にペンキをひっつけた等、複数の容疑で逮捕されたのですが、被疑者のHさんは「僕はやっていない。商売敵にハメられた」と全面否定、かれこれ2年近く勾留されています。接見禁止命令が出ているため家族とも一切会えず、彼は独りで無実を主張して闘っています。

勾留1年を過ぎた頃、Hさんは衝動的に鉄扉に頭を打ちつけるなどの拘禁反応が出たこともあり、私の接見が認められるようになりました。こうして私は本人に直接会い、家族との伝言役になり、彼の望む差し入れも可能になりました。できる限り公判の傍聴も行います。

裁判ではHさんは捜査の不自然さを指摘し「自分をハメた人」寄りの不公平な裁判だと、一貫して無実を主張するのです。この日の公判では、やり取りに我慢できずにHさんは度々口を挟んだり、通訳人に自分の主張を裁判官に伝えるよう迫ったりしました。裁判官は「被告人は不規則発言をやめなさい」と制し、検察側は呆れ顔で含み笑いをし、それを見たHさんは日本語で「何が可笑しい！」と大声を出すのです。公判が終わりに近づくと、進行に納得しないHさんが立ち上がって抗議、弁護士が窘めても聞かず、とうとう裁判官が「裁判を閉廷します」と宣告しました。抗議をやめないHさんを刑務官たちが力づくで抑え込み、強引に手錠をはめると、Hさんは「やめろ！私は人間だ、尊敬してください」と怒鳴り「私のコーランに触るな」と叫びました。その気迫に刑務官は手を緩め、コーランを彼の両手に静かに乗せました。Hさんは戸口で振り返って立ち止まり、家族と私に涙にぬれた顔で深々と一礼しました。

客観的には不利に見える裁判でも、本人に「私の側にいてほしい」と言われたら、私は喜んでその人と家族のそばにいたいと思いました。



7月21日夜 ^{たくま}達しさと^{かな}哀しさと

大阪城公園で野宿をしていた難民申請者から「おなかすいて動けない」とメッセージが届きました。私はその人をピックアップして夕食をともにしました。あいにくシェルターは満室ですし、日ごろお世話になる釜ヶ崎の人たちも連休中の夜では連絡が取れません。

ネットカフェでも数千円するしどうしようかと腕組みしていると、ご当人は「いいよ、また野宿する。公園で落として」と言い、私が「せめて寝袋と蚊取り線香を調達しよう」と言っても断り、大きな荷物を背負って車をおりました。運転席をのぞき込んで「ありがとね」と彼。気持ちが咎めた私は「あのね、明日もご飯一緒に行くか。」「うんわかった。」

シナピス、緊急時に備えてテントがいたと思いました。

彼を見送って帰宅すると、今度は神戸の病院から「肝硬変の人が泥酔、緊急入院させます」との一報が入りました。身寄りのないその人はシナピスの電話番号だけを告げたそうです。自分が肝硬変と知りながら潰れるまで酒を呷ってしまう独りぼっちの人。

明日は神戸へ見舞いに行こう。善人ぶっての行動ではなく、何もかも後で悔やみたくない私のエゴからです。

活動へのご支援ご協力を
よろしくお願いいたします。



お米、カップ麺、日持ちのする食料品、
フリガナ付きコミックのご寄付をお願いします

お電話をお待ちしています！！

☎06-6941-4999



シナピスホーム（カフェ）

8月の予定

カフェ：2、9、23、30日

★土曜日の13時頃～16時頃

8月 ランチはお休みです

問合わせ☎080-8940-8847

公式ラインとフェイスブックが
新しくなりました



公式ラインはこちらから

<https://lin.ee/hlNnRd6>



FaceBook はこちらから

<https://www.facebook.com/profile.php?id=61577353826677>



HP はこちらから

<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

「ニュースレター配布停止」、
「点訳版の郵送」をご希望の方は
シナピスにご連絡ください。

☎06-6942-1784

あとがき

ついに北海道でも40度に迫る暑さ。家庭のエアコン装着率は5割強ほど。屋内での熱中症に気をつけてと、お天気キャスターが呼びかけています。
昨年までの、汗だくになって一日に何度もアンダーシャツを着替えていた暮らしから、パソコンを見つめ、会議に参加して、言葉と向き合う仕事の中で、私は今、どんな汗をかいているのだろうと、ふと思います。
今のところ、大半は冷や汗と、実はわかっています。
明らかなミスや、共同作業の中で迷惑をかけることばかりで、「お前、謝ってばかりだな」ともう一人の私に笑われています。
今は、謝ること、感心することばかりの毎日ですが、早く、本気の汗、本物の汗をかいて働きたいです。(ゆ)

▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

◆広報活動

- ・教皇メッセージ、司教団メッセージ等
社会活動の指針の伝達
- ・読者と教会内外の社会活動をつなぐ
機関誌としてシナピスニュースを発行

◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携

◆学習会研修会の企画

◆こども基金

世界・日本のこどもたちへの援助

◆日本カトリック司教協議会との連携

正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、
カリタス、部落差別人権委員会に委員を派遣

◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ

◆難民移住移動者支援

難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル

☎ 06-6941-4999

アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22

カトリック大阪高松大司教区事務局内



●公共交通機関ご利用の場合

JR 森ノ宮駅より 約1000m

地下鉄中央線森ノ宮2番出口より 約800m

JR 玉造駅より 約1000m

地下鉄長堀鶴見緑地線玉造1番出口より約800m

●車でお越しの場合

阪神高速13号東大阪線法円坂出口

法円坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします

☐郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪高松大司教区

代表役員 前田万葉

☐三井住友銀行 玉造支店 普通 9401958

カトリック大阪高松大司教区 シナピス

代表役員 前田万葉

☐オンラインはこちら →→→

